

中国人日本語学習者による連語習得に関わる背景要因

黄叢叢（明治大学大学院生）・玉岡賀津雄（名古屋大学）
小森和子（明治大学）・母育新（西安外国語大学）

要 旨

本研究は、日中同形同義語（S語）を目的語とする和語動詞の動詞句（連語）の習得に、どのような要因が関わるかを検討したものである。対象語は和語動詞で、中国語にも同じ漢字が含まれているか否か（共有：「誤解を招く」・「招致误解」、非共有：「注目を集める」・「引起注目」）を基準に各14語（計28語）選定してテストを作成し、中国人日本語学習者82名に調査した。連語の正誤を、(1) 漢字共有の有無、(2) 日本語での連語の使用頻度、(3) 日本語での和語動詞の使用頻度、(4) 中国語でのS語の使用頻度、(5) 日本語でのS語の使用頻度、(6) 日本語習熟度、の6変数で決定木分析を用いて予測した。その結果、(6) 日本語習熟度が連語習得に対して最も強い要因となった。上位群は、(2) 連語の使用頻度が影響したのに対して、中・下位群では、(1) 漢字共有の有無が有意な予測変数となり、漢字共有の場合は(2) 連語の使用頻度が影響した。

【キーワード】 中国人日本語学習者 日中の漢字共有 S語 連語 決定木分析化

1. はじめに

「連語」とは、一般に、語と語が慣習的に結びついている言語形式を指す。そして、連語は、第二言語としての日本語の習得において、非常に重要な項目の一つであると言われている（大曾・滝沢 2003；曹・仁科 2006；小森 2014；劉 2016；李 2016）。大曾・滝沢（2003）は、中級および上級学習者にとって、連語の産出ができるかどうか、日本語表現の自然さに影響する重要な項目であると指摘している。しかしながら、日本語学習者の場合、連語あるいは連語の語彙を日本語と母語とで共有している場合は、母語の連語をそのまま日本語に翻訳して使ってしまう傾向があり、不自然な連語を産出することが少なくないという指摘がある（曹・仁科 2006；小森 2014；劉 2016）。特に、中国語を母語とする日本語学習者（以下、中国人日本語学習者）においては、母語の連語をそのまま日本語に置き換えて「*傘を打つ」（←「打傘」、「傘をさす」の意）、「*成功を取る」（←「取得成功」、「成功を収める」の意）、「*拍手を起こす」（←「响起掌声」、「拍手を送る」の意）のような不自然な連語を産出しやすく、上級学習者になっても、母語の影響を抑えることができないという報告もある（小森・三國・徐・近藤 2012；小森 2014）。しかし、言語習得が進めば、母語の影響は徐々に回避できるようになるはずである。よって、習得を妨げる要因の検討に加え、

どのような場合に習得を促すのか、その背景となる要因を総合的に検討する必要がある。そこで、本研究では、中国人日本語学習者を対象に、名詞と和語動詞からなる動詞句の連語に絞り、習得に関わる要因を多角的に検討することにした。

2. 先行研究

文化庁（1978）は、日本語に使用されている漢語約2,000語を、日本語と中国語の意味の異同によって、同形同義語（以下、S語）、同形類義語（以下、O語）、同形異義語（以下、D語）、および中国語にない漢語（以下、N語）の4種類に分けている。S語は、たとえば「混乱」、「睡眠」、「生活」など、日中で同じ書字で表記され、意味も同じ、または類似していることから、概念の想起が容易な漢語である。ただし、S語の中にも中国語と同じ共起語が取れるものと取れないものがある。小森・三國・徐・近藤（2012）は、このことに着目し、中国人日本語学習者のS語とその共起語の連語の習得について検討した。その結果、中国語と同じ漢字が使われている漢語の連語だけではなく、中国語と同じ漢語に対応している和語の連語についても、中国語の知識を用いて、理解されていることがわかった。

これについて、孟（2015）は、漢字は意味上の最小単位の形態素（morpheme）であるため、中国人日本語学習者は、漢字かな交じりの日本語文を見ると、漢字に注意を向けて意味を推測する傾向があることを指摘している。たとえば、語彙のレベルでも、「食べる」、「座る」、「歩く」、「流す」など漢字かな交じりの和語動詞の中に、中国語と同じ書字が用いられていれば、そこに含まれる漢字から意味を推測するので、習得が容易な場合が多くなるということである。

また、黄（2017）は、孟（2015）の指摘を裏付ける研究として注目される。黄（2017）では、S語の目的語と和語動詞からなる動詞句を連語と定義し、その習得について、自由記述形式のテストと調査対象者へのフォローアップ・インタビューによって検討し、学習者がどのような誤用を、どのようにして起こしているのかについて分析、考察した。その結果、中国語の動詞句をそのまま日本語にするタイプの誤用が全誤用の40%以上を占めており、最も多いことがわかった。たとえば、「*誤解を起こす」という誤用は中国語の「引起误解」から、「*考慮に加える」は「加以考虑」から起こった誤用である。さらに、このような誤用の傾向は日本語能力試験N1合格者にも見られていた。これは、日本語習熟度が高くなっても、母語の影響が強いことを示している。

ただし、日本語学習者が想起する中国語によっては、誤用ではなく、正しい日本語の産出につながる場合がある。たとえば、「成功を（ ）」という問いの場合、想起した中国語が「取得成功」であれば、「*成功を取る」という誤用になる可能性がある。一方、中国語の「收获成功」を想起すれば、「成功を収める」と正しく産出できる可能性もある。そこで、本研究では、S語と共起する動詞が中国語と共通するために、

中国語の想起によって正しい日本語の連語が産出できる場合と、そうでない場合を区別して、必ず一方の漢字を想起する可能性の高い連語のみを選んで調査した。

3. 研究課題

上述した先行研究を踏まえ、本研究では、日中両言語の語彙と連語の特性、および中国人日本語学習者の日本語習熟度が、S語を目的語として取る動詞句の連語習得にどのように影響しているかを検討する。なお、多様な要因のいずれの影響が強いのかを検討するために、本研究では決定木分析という多変量解析を用いる。

4. 研究方法

4. 1. 研究対象の日本語学習者

調査対象者は、中国の大学の日本語科に在籍する学生82名である。調査対象者の調査時点での平均学習歴は、3年7カ月であった。82名のうち、39名は日本語能力試験N2に合格しており、43名はN1に合格していた。82名のうち、9名は1週間から1年間の日本滞在経験があったが、残りの73名は日本滞在の経験はなかった。

4. 2. 日本語習熟度テストと群分け

本調査では、日本語学習者の日本語習熟度を測定するために、平成18年度の（旧）日本語能力試験問題の1級と2級の問題から文字、語彙、文法をそれぞれ15問（計45問）選んで作成した日本語習熟度テストを課した（国際交流基金・日本国際教育支援協会に使用許諾を得ている）。このテストを1問1点で採点したところ、平均は32.24点、標準偏差は6.89点となった。これに基づいて、日本語学習者を習熟度別に、上位群、中位群、下位群の3群に分けた。具体的には、29点から35点の学習者を中位群とし（平均31.93点、標準偏差1.82点）、その上の37点から最高点の44点を上位群（平均39.76点、標準偏差は2.10点）、最低点の15点から28点を下位群（平均23.88点、標準偏差3.21点）とした。この3群の得点について一元配置の分散分析を行った結果、その差は有意であった [$F(2,79) = 291.16, p < .001$]。なお、この日本語習熟度テストの信頼性を、クロンバックのアルファ係数（Cronbach's α ）で求めたところ、 $\alpha = 0.88$ と高かった。

4. 3. 連語テストの作成

4. 3. 1. 連語の選定手順

本研究で使われた対象語の連語は、以下のような手順で抽出した。まず、小森・早川・玉岡（2017）の「日中対照漢字二字熟語データベース」（朴・熊・玉岡（2014）も参照）を母集団語群とし、その中に含まれる1,509の同形語から、文化庁（1978）と張（1987）の基準に基づき、1,193語のS語を抽出した。さらに、それらのS語のうち、日

本語の品詞が名詞と動詞の両方であるものを163語抽出した。その後、これらのS語のうち、村木（1991）によって機能動詞とされた和語動詞と共に起るS語のみに絞り、S語と和語動詞の連語を抽出した。その結果、S語の数が87語になった。最後に、国立国語研究所のNLB（NINJAL-LWP for BCCWJ）で、連語としての使用頻度が60以上の語に絞った。この手順を経て、最終的に28ペアの連語を抽出した。

次に、この28連語が本研究の目的に即しているか否かの確認を行った。本研究では、連語の習得において、中国語の動詞に含まれる漢字が日本語の和語動詞の漢字と同じであるかどうか、つまり両言語での漢字共有の有無による影響を検討することを目的としているので、漢字共有の有無がいくつずつあるのかを確認した。その結果、それぞれで14ずつであることがわかった。たとえば、「攻撃を受ける」という連語であれば、中国語の相当表現である「受到攻击」と「受」が共有されている。一方、日本語の「注目を集める」であれば、相当表現の中国語は「引起注目」となり、「集」≠「引」とで共有されていない。この場合、習得が不十分であれば、中国語の「引起注目」から「*注目を引く」という誤った連語を想起してしまうであろう。

このようにして抽出した共有、非共有の各14語（計28語）は、以下の通りである。なお、参考までに対応する中国語の表現を併記しておく。

日中で漢字を共有する連語 (n = 14) :

- | | |
|-------------|------|
| (1) 評価を得る | 得到评价 |
| (2) 理解を深める | 加深理解 |
| (3) 判断を下す | 下判断 |
| (4) 考慮に入れる | 加入考虑 |
| (5) 成功を収める | 收获成功 |
| (6) 攻撃を受ける | 受到攻击 |
| (7) 援助を受ける | 受到援助 |
| (8) 信頼を得る | 得到信赖 |
| (9) 修正を加える | 加以修正 |
| (10) 決定を下す | 下决定 |
| (11) 反対に遭う | 遭到反对 |
| (12) 損害を被る | 被损害 |
| (13) 抵抗を受ける | 受到抵抗 |
| (14) 誤解を招く | 招致误解 |

日中で漢字を共有しない連語 (n = 14) : (*) は中国語から想起しやすい誤用

- | | |
|-----------|-------------------------|
| (1) 生活を送る | 过着生活 (*生活を <u>過</u> ごす) |
| (2) 調整を図る | 进行调整 (*調整を <u>進</u> める) |

(3) 注意を払う	受到注意 (*注意を <u>受</u> ける)
(4) 期待を掛ける	持有期待 (*期待を <u>持</u> つ)
(5) 努力を重ねる	继续努力 (*努力を <u>継</u> ぐ)
(6) 期待を集める	回 <u>应</u> 期待 (*期待を <u>应</u> じる)
(7) 負担を掛ける	增加負担 (*負担を <u>増</u> やす)
(8) 感動を与える	感 <u>到</u> 感动 (*感動を <u>感</u> じる)
(9) 実行に移す	贯 <u>彻</u> 实行 (*実行に <u>貫</u> く)
(10) 拍手を送る	响 <u>起</u> 掌声 (*拍手を <u>起</u> こす)
(11) 会話を交わす	进 <u>行</u> 会话 (*会話を <u>進</u> める)
(12) 注目を集める	引 <u>起</u> 注目 (*注目を <u>引</u> く)
(13) 批判を浴びる	得 <u>到</u> 批判 (*批判を <u>得</u> る)
(14) 拍手を浴びる	得 <u>到</u> 掌声 (*拍手を <u>得</u> る)

4. 3. 2. 連語である動詞句を構成する名詞と和語動詞の特性の統制

これらの各14連語については、6つの語彙的特性を確認し、漢字共有と非共有とで特性に違いがないことを、独立したサンプルの t 検定で確認した(表1)。6つの特性とは、(1) 連語の目的語の中国語での使用頻度 [自然対数に変換した値 ((使用頻度は正規分布しないので、ネイピア数 $e \approx 2.718281828459 \dots$ を底をとする自然対数に変換した値) で分析、 $t(1) = 0.29, ns$)、(2) 目的語の日本語での使用頻度 [自然対数変換、 $t(1) = -0.05, ns$]、(3) 和語動詞の難易度 (旧・日本語能力試験での出題基準 [$t(1) = 0.48, ns$]、(4) 和語動詞の日本語での使用頻度 [自然対数変換、 $t(1) = 0.25, ns$]、(5) 名詞と動詞から構成される連語全体の使用頻度 [自然対数変換、 $t(1) = 0.06, ns$]、(6) 連語のMIスコア [$t(1) = 0.74, ns$] である。なお、(1) は北京語言大学BCC現代漢語語料庫 (<http://bcc.blcu.edu.cn/>) を使用し、(2) (4) (5) は、現代日本語書き言葉均衡コーパス(通常版) BCCWJ-NT (<http://nlb.ninjal.ac.jp/search/>) を使用した。また、MIスコアは、連語である動詞句の名詞と和語動詞の結合関係の強さを示す指標である。なお、目的語となるS語の難易度は25語が2級、残り3語が3級で統制してある。このように、6つの特性について、抽出した日中で漢字共有14連語と非共有14連語の間に有意な違いはなかった。よって、両条件を直接比較できる。

4. 3. 3. 目的語のS語と共起する和語動詞の習得を測定する連語テスト

和語動詞と目的語の連語習得を測定するために、例文を作成し、動詞部分を空所にした四者択一形式の問題を作成した。たとえば、「生活を送る」なら、「私は第一希望の大学に入って、毎日とても充実した生活を() います。」に対して、「送る」、「過ごす」、「届ける」、「暮らす」から正しい動詞を選ぶという形式である。

誤答選択肢は、3つのタイプを作成した。一つ目は、中国語ではS語と共起できる

表1 日中の漢字共有・非共有条件の連語の特性

漢字共有	連語	S語の 難易度	S語の使用頻度 (日本語)	S語の使用頻度 (中国語)	動詞の 難易度	動詞の使用頻度 (日本語)	連語使用頻度	MIスコア
	評価を得る	2	14,304(9.57) 高	123,253(11.72) 高	2	23,194(10.05) 高	173(5.15) 高	8.12
	理解を深める	2	9,731(9.18) 高	141,835(11.86) 高	1	1,923(7.56) 低	485(6.18) 高	13.53
	判断を下す	2	7,977(8.98) 高	59,399(10.99) 高	0	2,307(7.74) 低	167(5.12) 高	12.27
	考慮に入れる	2	692(6.54) 低	174,222(12.07) 高	4	34,570(10.45) 高	310(5.74) 高	19.91
	成功を収める	2	3,803(8.24) 低	268,569(12.50) 高	2	2,375(7.77) 低	320(5.77) 高	14.08
	攻撃を受ける	2	5,541(8.62) 高	41,930(10.64) 低	3	39,409(10.58) 高	255(5.54) 高	9.76
	援助を受ける	2	5,296(8.57) 高	31,154(10.35) 低	3	39,409(10.58) 高	187(5.23) 高	8.84
共有	信頼を得る	2	4,342(8.38) 低	12,477(9.43) 低	2	23,194(10.05) 高	138(4.93) 高	9.51
	修正を加える	2	2,196(7.69) 低	24,122(10.09) 低	2	11,401(9.34) 高	96(4.56) 高	11.20
	決定を下す	2	9,780(9.19) 高	335,443(12.72) 高	0	2,307(7.74) 低	78(4.36) 低	11.52
	反対に遭う	3	6,804(8.83) 高	101,928(11.53) 高	2	3,190(8.07) 低	29(3.37) 低	10.45
	損害を被る	2	3,492(8.16) 低	57,902(10.97) 高	0	3,105(8.04) 低	84(4.43) 低	13.06
	抵抗を受ける	2	3,503(8.16) 低	26,090(10.17) 低	3	39,409(10.58) 高	36(3.58) 低	9.16
	誤解を招く	2	1,216(7.10) 低	11,209(9.32) 低	2	2,998(8.01) 低	115(4.74) 低	13.00
	生活を送る	3	36,195(10.50) 高	668,920(13.41) 高	3	12,665(9.45) 高	996(6.90) 高	11.01
	調整を図る	2	7,314(8.90) 高	196,644(12.19) 高	1	16,805(9.73) 高	156(5.05) 高	9.82
	注意を払う	3	6,958(8.85) 高	269,366(12.50) 高	3	7,071(8.86) 低	556(6.32) 高	13.12
	実行に移す	2	3,348(8.12) 低	199,309(12.20) 高	2	2,888(7.97) 低	270(5.60) 高	14.56
	負担を掛ける	2	9,517(9.16) 高	56,201(10.94) 低	3	28,536(10.26) 高	220(5.39) 高	9.25
	会話を交わす	3	4,236(8.35) 低	2,024(7.61) 低	1	2,546(7.84) 低	138(4.93) 高	12.76
	注目を集める	2	2,297(7.74) 低	4,869(8.49) 低	3	6,278(8.74) 低	447(6.10) 高	12.87
	期待を掛ける	2	6,028(8.70) 高	131,891(11.79) 高	4	28,536(10.26) 高	88(4.48) 低	8.24
非共有	努力を重ねる	2	7,164(8.88) 高	309,196(12.64) 高	2	4,180(8.34) 低	119(4.78) 低	9.66
	期待を集める	2	6,028(8.70) 高	131,891(11.79) 高	3	6,278(8.74) 低	23(3.14) 低	8.40
	感動を与える	2	2,082(7.64) 低	93,986(11.45) 高	2	19,519(9.88) 高	72(4.28) 低	9.78
	拍手を送る	2	862(6.76) 低	4,752(8.47) 低	3	12,665(9.45) 高	97(4.57) 低	12.04
	批判を浴びる	2	4,302(8.37) 低	22,449(10.02) 低	4	2,407(7.79) 低	58(4.06) 低	11.70
	拍手を浴びる	2	862(6.76) 低	4,752(8.47) 低	4	2,407(7.79) 低	16(2.77) 低	11.27

注：使用頻度については、括弧内に自然対数変換した値を示す。
S語の難易度、動詞の難易度については、日本語能力試験出題基準（旧）に掲載された難易度であり、0は級外を表す。

動詞に含まれる単漢字を選び、それを和語動詞に変えると誤りとなる動詞である。たとえば、「生活」の場合、中国語で共起できる動詞「过着生活」から「過ごす」という誤答選択肢を設けた。二つ目は、正解の和語動詞と意味の似ている和語動詞である。たとえば、この問題では、正解が「送る」であるため、その類義語として「届ける」を選んだ。なお、類義の動詞の抽出の際には、日本語教育語彙表 ver1.0などの意味記述を参考にした。三つ目は、黄（2017）で、誤用者数が多いとされている和語動詞である。たとえば、「生活を送る」では、50名のうち5名（10.00%）が記述した和語動詞の「暮らす」を選んだ。

このような方法で、すべての問題について、誤答選択肢を作成した。実際に使用した例文は、表2に示した通りである。なお、正解の和語動詞の語彙難易度は表1に示したように、4級が4語、3級が9語、2級が9語、1級が3語、級外が3語であったが、誤答選択肢の難易度を確認したところ、4級が21語、3級が14語、2級が33語、1級が13語、級外が3語であった。

なお、問題文の作成にあたっては、現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）を参考にしながら、4級から2級までの語を中心に作成した。ただし、文の自然さを考慮して1級の語の使用がより適当であると判断した場合には、中国人日本語学習者にとってなじみがある同形語のS語を使用するようにした。文の統語構造（文法）については、（旧）日本語能力試験の出題基準を参照して、4級と3級の文法・文型を使うようにした。文の長さも、（旧）日本語能力試験の出題基準に基づいて、20～45字程度とし、文体は丁寧体に統一した。なお、調査対象者82名にこの連語テストを実施した結果、クロンバックのアルファ係数（Cronbach's α ）は $\alpha=0.78$ と高かった。

5. データ分析

5. 1. 分析

本研究は、連語の習得にどのような要因がどのように影響するのかを分析することを目的としているため、決定木分析を行うことにした。決定木分析は、複数の要因群（独立変数）から、予測に有意に働く目的変数（従属変数）を選び、影響の強さに応じて要因を樹形図の形で階層的に描いてくれる。木の上部にある要因はより強い影響力を持ち、次のレベルには上の要因と最も交互作用の強い要因が選ばれ、枝を成長させていく。他要因との交互作用がなければ枝は伸びない。また、有意でない要因は樹形図には含まれない。本研究では、(1) 漢字共有の有無（有り・無し）、(2) 日本語での連語の使用頻度（自然対数4.93以上が高頻度、それ未満が低頻度）、(3) 日本語での和語動詞の使用頻度（自然対数9.34以上が高頻度、それ未満が低頻度）、(4) 中国語でのS語の使用頻度（自然対数10.97以上が高頻度、それ未満が低頻度）、(5) 日本語でのS語の使用頻度（自然対数8.57以上が高頻度、それ未満が低頻度）、および(6) 日本語学習者の日本語習熟度（上位群・中位群・下位群）、の合計6の要因で、連語の正誤

表2 連語の問題文

漢字共有	連語 (動詞句)	問題文
共有	<p>評価を得る 理解を深める 判断を下す 考慮に入れる 成功を収める 攻撃を受ける 援助を受ける 信頼を得る 修正を加える 決定を下す 反対に遭う 損害を被る 抵抗を受ける 誤解を招く</p>	<p>ドイツは、温暖化対策で、世界各国から大変高い評価を () います。 留学生は、お互いの理解を () ために、いろいろな交流活動をしています。 部下は反対していたが、社長は自分の経験をもとに、最終的な判断を () 。 大学を選ぶ時は、自分の能力だけでなく、親の経済的な状況も考慮に () ほうがいいです。 陳さんは日本で会社を作り、ITビジネスで成功を () 、今では大金持ちになりました。 勝つと思って油断していたら、突然、敵の攻撃を () 、負けてしまいました。 発展途上国は、毎年、先進国から経済的な援助を () います。 新しい職場に入ったばかりの時は、周りの人の信頼を () には時間がかかります。 この論文の表はわかりにくいので、わかりやすくなるように、修正を () ください。 大人というのは、自分で考え、決定を () 、責任を取るものです。 就職しないで留学すると言いついたら、私は両親の大反対に () しました。 会社にとって重大な情報が社外に流出してしまい、会社は大きな損害を () しました。 先週、大統領が新しい法案を発表しましたが、議会の抵抗を () 、決定できませんでした。 「いいです」という日本語は、「OKです」の意味でも、「必要ないです」の意味でも使われます。 相手の誤解を () ないように、どちらの意味かわかりやすい時に、使ったほうがいいでしょう。 私は第一希望の大学に入って、毎日とても充実した生活を () います。 二つのグループの意見が全く異なるので、調整を () 必要があります。 電話では、相手の顔が見えないので、ことばの表現に注意を () ほうがいいです。 計画を立てたら、それで終わりではありません。きちんと計画を実行に () べきです。 親にお金の負担を () たくないので、大学院に進学せず、就職することになりました。 うちの父と母は忙しくて話す時間があまりありません。お互いに会話しにくい話を () いません。 世界のファッションショーでは、華やかな民族衣装が観客の注目を () しました。 親が自分の子どもに大きな期待を () のは、世界中どの家庭でも同じことです。 今はまだ夢であっても、努力を () ければ、その夢も実現できると思っています。 若い政治家の政策は、若者にとって魅力的で、10代や20代の人たちの期待を () います。 彼は世界的に有名な画家で、人に感動を () 作品をたくさん発表しています。 演奏が終わると、1万人の観衆は立ち上がり、その歌手に盛大な拍手を () 。 この青年は事件に無関係だと判明し、青年を捕まえた警察は、世間から強い批判を () 。 私は先週の研究発表大会で、最新の研究成果を発表し、会場からたくさんの拍手を () 。</p>
非共有	<p>生活を送る 調整を図る 注意を払う 実行に移す 負担を掛ける 会話を交わす 注目を集める 期待を掛ける 努力を重ねる 期待を集める 感動を与える 拍手を送る 批判を浴びる 拍手を浴びる</p>	<p>私は第一希望の大学に入って、毎日とても充実した生活を () います。 二つのグループの意見が全く異なるので、調整を () 必要があります。 電話では、相手の顔が見えないので、ことばの表現に注意を () ほうがいいです。 計画を立てたら、それで終わりではありません。きちんと計画を実行に () べきです。 親にお金の負担を () たくないので、大学院に進学せず、就職することになりました。 うちの父と母は忙しくて話す時間があまりありません。お互いに会話しにくい話を () いません。 世界のファッションショーでは、華やかな民族衣装が観客の注目を () しました。 親が自分の子どもに大きな期待を () のは、世界中どの家庭でも同じことです。 今はまだ夢であっても、努力を () ければ、その夢も実現できると思っています。 若い政治家の政策は、若者にとって魅力的で、10代や20代の人たちの期待を () います。 彼は世界的に有名な画家で、人に感動を () 作品をたくさん発表しています。 演奏が終わると、1万人の観衆は立ち上がり、その歌手に盛大な拍手を () 。 この青年は事件に無関係だと判明し、青年を捕まえた警察は、世間から強い批判を () 。 私は先週の研究発表大会で、最新の研究成果を発表し、会場からたくさんの拍手を () 。</p>

(0・1) を予測する決定木分析（回帰木分析）を行った。なお、MIスコアは連語の使用頻度と密接に関連する値であるため、除くこととした。また、分析には、IBM-SPSS Statistics version 22.0 で起動する IBM SPSS Decision Trees の統計解析ソフトを使用した。

5. 2. 記述統計

まず、28語のそれぞれの正答率は表3に示した通りである。

全体の平均正答率は46.8%と低く、S語を目的語とする連語の習得が全般的に難しい傾向にあることが窺える。また、「期待を集める」では、82名のうち正答できたのは5名（正答率6.1%）で、上位群でもほとんど正答できていない連語であることがわかる。その一方で、「理解を深める」「信頼を得る」のように、下位群でも正答率が90%を超える連語もあった。さらに、「注意を払う」「会話を交わす」のように下位群では正答率が40%未満でも上位群では80%を超えるなど、習熟度に比例して正答率が高くなっている連語もあった。

5. 3. 連語習得の諸要因の違い

決定木分析の結果は、図1に示した通りである。82名の中国人日本語学習者に対して、28問の連語テストを実施したため、82（学習者）×28（連語の項目）で、合計2,296の反応数である。図1から分かるように、まず、連語の習得に最も強く影響を与えたのは日本語習熟度 [$F(2,2293)=76.67, p<.001$] であった。上位群の正答率は63.4%、中位群は40.7%、下位群は34.3%であった。これは、日本語習熟度が上がるにつれて、連語の習得が進んでいることを示している。

二番目に影響を与えた要因は、上位群と中位群・下位群でそれぞれ異なることが決定木分析で示された。そこで、次節では日本語習熟度別に分析結果を報告する。

5. 3. 1. 上位群の連語習得に影響する主要因

まず、上位群では、日本語での連語全体の使用頻度が有意な予測変数となった [$F(1, 810)=10.32, p<.001$]。使用頻度の高い連語は正答率が高く、68.5%であった。使用頻度の低い場合は57.6%であった。次に影響していた要因は、日本語での連語全体の使用頻度が高い場合は、中国語でのS語の使用頻度が有意な予測変数となった [$F(1,433)=13.86, p<.001$]。具体的には、中国語でのS語の使用頻度が低い連語の方が正答率が高く、78.7%であったのに対して、中国語でのS語の使用頻度が高い連語は61.7%の正答率にとどまった。

一方、日本語での連語全体の使用頻度が低い場合は、日本語でのS語の使用頻度が有意な予測変数となった [$F(1,375)=8.46, p<.01$]。日本語でのS語の使用頻度が低い連語では正答率が63.4%と高かったのに対して、S語の使用頻度が高い場合は、正答率が48.3%であった。

表3 各群における各連語の正答者数と正答率（括弧内）

漢字共有	連語の使用頻度	連語	S語の使用頻度 (中国語)	S語の使用頻度 (日本語)	上位群 (N=29)	中位群 (N=28)	下位群 (N=25)	全体 (N=82)
共有	高	評価を得る	高	高	8(27.6%)	6(21.4%)	3(12.0%)	17(20.7%)
		理解を深める	高	高	27(93.1%)	28(100.0%)	24(96.0%)	79(96.3%)
		判断を下す	高	高	19(65.5%)	5(17.9%)	4(16.0%)	28(34.2%)
		考慮に入れる	高	低	23(79.3%)	13(46.4%)	7(28.0%)	43(52.4%)
		成功を取める	高	低	17(58.6%)	15(53.6%)	9(36.0%)	41(50.0%)
		攻撃を受ける	低	高	14(48.3%)	11(39.3%)	11(44.0%)	36(43.9%)
	低	援助を受ける	低	高	28(96.6%)	27(96.4%)	22(88.0%)	77(93.9%)
		信頼を得る	低	低	26(89.7%)	25(89.3%)	23(92.0%)	74(90.2%)
		修正を加える	低	低	17(58.6%)	4(14.3%)	4(16.0%)	25(30.5%)
		決定を下す	高	高	18(62.1%)	6(21.4%)	4(16.0%)	28(34.1%)
		反対に遭う	高	高	19(65.5%)	17(60.7%)	9(36.0%)	45(54.9%)
		損害を被る	高	低	25(86.2%)	22(78.6%)	17(68.0%)	64(78.0%)
		抵抗を受ける	低	低	23(79.3%)	10(35.7%)	15(60.0%)	48(58.5%)
誤解を招く	低	低	7(24.1%)	3(10.7%)	2(8.0%)	12(14.6%)		
	平均			19(65.5%)	14(50.0%)	11(44.0%)	44.1(53.7%)	
非共有	高	生活を送る	高	高	16(55.2%)	10(35.7%)	0(0.0%)	26(31.7%)
		調整を図る	高	高	17(58.6%)	8(28.6%)	8(32.0%)	33(40.2%)
		注意を払う	高	高	25(86.2%)	9(32.1%)	1(4.0%)	35(42.7%)
		実行に移す	高	低	11(37.9%)	1(3.6%)	2(8.0%)	14(17.1%)
		負担を掛ける	低	高	21(72.4%)	12(42.9%)	4(16.0%)	37(45.1%)
		会話を交わす	低	低	24(82.8%)	14(50.0%)	8(32.0%)	46(56.1%)
	低	注目を集める	低	低	24(82.8%)	14(50.0%)	14(56.0%)	52(63.4%)
		期待を掛ける	高	高	9(31.0%)	3(10.7%)	4(16.0%)	16(19.5%)
		努力を重ねる	高	高	20(69.0%)	11(39.3%)	7(28.0%)	38(46.3%)
		期待を集める	高	高	4(13.8%)	0(0.0%)	1(4.0%)	5(6.1%)
		感動を与える	高	低	20(69.0%)	17(60.7%)	7(28.0%)	44(53.7%)
		拍手を送る	低	低	16(55.2%)	5(17.9%)	5(20.0%)	26(31.7%)
		批判を浴びる	低	低	26(89.7%)	13(46.4%)	15(60.0%)	54(65.9%)
拍手を浴びる	低	低	13(44.8%)	8(28.6%)	10(44.0%)	31(37.8%)		
	平均			18(62.1%)	9(32.1%)	6(24.0%)	33(40.2%)	
	全体平均正答者（率）			18.39(63.4%)	11.39(40.7%)	8.57(34.3%)	38.36(46.8%)	

つまり、上位群において、日本語での連語全体の使用頻度が高い場合は、中国語でのS語の使用頻度が影響を与え、日本語での連語の使用頻度が低い場合は、日本語でのS語の使用頻度が影響する、という結果となったということである。

5. 3. 2. 中位群の連語習得に影響する主要因

次に、中位群を見てみると、上位群とは異なり、日中での連語の動詞に含まれる漢字共有の有無（共有・非共有）が有意な予測変数となった [$F(1,782)=25.38, p<.001$]。中位群の日本語学習者は、日中両言語で同じ漢字が含まれているか否かに基づいて、日本語の連語を理解し、習得していると考えられる。漢字が共有されている連語の方は正答率が高く、49.5%であったのに対して、漢字が共有されていない連語の正答率は31.9%と低かった。さらに、漢字共有の連語において有意な予測変数となったのは、日本語での連語全体の使用頻度であった [$F(1,390)=19.46, p<.001$]。連語全体の使用頻

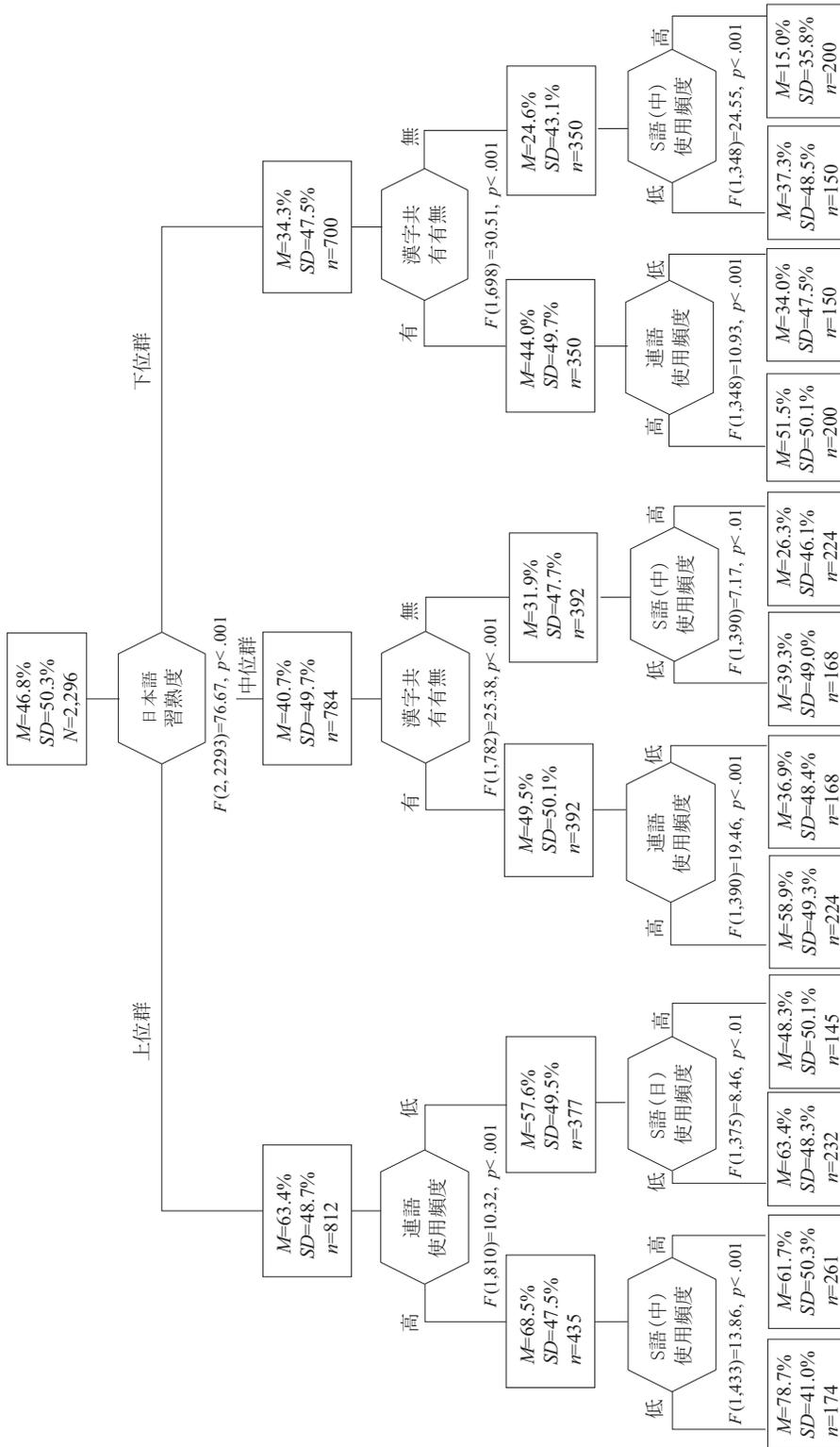


図1 決定木分析による連語習得に及ぼす要因分析

度が高い方が正答率が高く、58.9%であったのに対して、使用頻度の低い連語の正答率は36.9%であった。一方、漢字非共有の連語では、中国語でのS語の使用頻度が有意な予測変数となった [$F(1,390)=4.07, p<.05$]。これは上位群と同様、中国語でのS語の使用頻度が低い連語の方が正答率が高く、39.3%であったのに対して、中国語での使用頻度の高い連語では、わずか26.3%の正答率であった。

5. 3. 3. 下位群の連語習得に影響する主要因

最後に、下位群を見ると、中位群と同じ結果であることがわかる。つまり、日中の連語の動詞に含まれる漢字が共有されているかどうかがある有意な予測変数となった [$F(1,698)=30.51, p<.001$]。漢字が共有されている連語の正答率は44.0%と高く、漢字非共有の正答率は24.6%と非常に低かった。さらに、漢字共有の連語については、日本語での連語の使用頻度が有意な予測変数 [$F(1,348)=10.93, p<.001$] で、日本語での連語の使用頻度が高い場合は正答率が51.5%であったのに対して、使用頻度が低い連語は34.0%であった。さらに、漢字非共有においては、中国語でのS語の使用頻度が有意な予測変数となった [$F(1,348)=24.55, p<.001$]。中国語でのS語の使用頻度が低い連語の正答率は37.3%であったのに対して、使用頻度の高い連語の正答率は15.0%に過ぎなかった。

6. 考察

本研究は、S語を目的語とする動詞句の連語の習得に、どのような要因が影響を及ぼすのかを検討することを目的として、82名の中国人日本語学習者を対象に、四者択一形式の日本語習熟度テストと連語テストを行った。要因の検討には、連語の正誤を予測する6つの変数、すなわち、(1) 漢字共有の有無、(2) 日本語での連語の使用頻度、(3) 日本語での和語動詞の使用頻度、(4) 中国語でのS語の使用頻度、(5) 日本語でのS語の使用頻度、(6) 日本語習熟度、を設定し、決定木分析を用いて検討した。その結果、中国人日本語学習者の連語習得において、最も強く影響する要因は、(6) 日本語の習熟度であることがわかった。次に有意だったのは、上位群では(2) 連語全体の使用頻度であった。中位群と下位群はいずれも(1) 漢字共有の有無であった。そこで、以下では習熟度別に考察していくこととする。

まず、上位群では、日本語での連語全体の使用頻度が最も強く影響している。連語全体の使用頻度の高い連語は正答率が高く、使用頻度が低い連語は正答率が低いということである。これは、上位群が語単体の意味の習得の段階から、どのように語が使われるのかという語の用法の習得の段階に移っているため、頻繁に接触する連語の習得が進んできたからだと考えられる。

そして、上位群の中でも、連語全体の使用頻度が高い場合には、S語の中国語での使用頻度が最も影響を及ぼしており、中国語での使用頻度が低い方が正答率が高かつ

た。これはなぜであろうか。中国語での使用頻度が低いということは、S語自体を中国語ではあまり使用しないということであるから、共起する中国語の動詞も想起されにくい。そのため、中国語の知識があまり活用されず、転移もされにくい。よって、結果として日本語の連語形式の習得が進むのではないかと考えられる。

一方、連語全体の使用頻度が低い場合には、S語の日本語での使用頻度が影響している。日本語での使用頻度が低い方が正答率が高かった。理由としては、以下のようなことが考えられる。日本語でのS語の使用頻度が低い場合には、学習者がS語自体をあまり見聞きすることはないであろう。しかし、そのS語を目にするときには、いつも特定の連語の中で使われているため、結果としてその連語で記憶することができるようになるのではないかと考えられる。たとえば、「損害」の場合、連語の「損害を被る」の使用頻度(対数変換)は4.43で、今回の基準では低頻度であり、S語部分の「損害」も日本語での使用頻度が8.16で、低頻度である(表1を参照)。しかし、「損害を被る」の正答率は78.0%と非常に高かった。学習者は使用頻度の低い「損害」を目にすることは少ないものの、目にした際には「被る」と共に用いられるため、結果として「損害を被る」という連語での習得が進んだのではないかと考えられる。

一方、上位群とは異なり、中位群と下位群において、いずれも漢字共有の有無が最も強い影響を及ぼしている。すなわち、連語の和語動詞に使われている漢字が中国語の相当語の動詞にも使われているか否かである。漢字が共有されている動詞の連語の方が正答率が高かった。たとえば、「援助を受ける」、「信頼を得る」に用いられる「受」、「得」は、中国語の相当語でも「受到援助」、「得到信頼」のように用いられる。日本語のS語の部分を見て、すぐに中国語の動詞を想起し、同じ漢字を用いた和語動詞の選択肢が選びやすかったのだろう。また、中国語では、「受到」、「得到」ともに後項に「到」が付いているが、これは結果を表す機能を持つ補語に過ぎず、動詞の意味の中心は「受」、「得」である。つまり、中国語でも、「援助」と共起する動詞の意味の中心は「受」に託されており、日本語における「受ける」の構造と近い。このように、意味の中心となる漢字が日中で同じ動詞は、目的語も日中で同じ語を取ることが多い。中国人日本語学習者は主要な意味を担う漢字に着目し、日中で意味の比較をすることで、連語においても同じ(あるいは類似の)目的語を取ることができる、というストラテジーを用いて、連語を習得しているのではないかと推測される。とりわけ、日本語習熟度が不十分な中位群と下位群は、こうしたストラテジーを用いて、日本語の連語を推測、習得するのではないかとと思われる。

続いて、漢字共有の有無の次に影響していた要因は、日本語での連語全体の使用頻度と中国語でのS語の使用頻度の高低であった。漢字が日中共有の場合は、日本語での連語全体の使用頻度が高いほど、正答率が高かった。使用頻度が高い連語の方が習得しやすいというのは、理にかなった結果であろう。一方、漢字が非共有の場合は、S語の中国語での使用頻度が影響し、中国語での使用頻度が低い連語の方が、正答率

が高いという結果であった。この現象は、上位群にも認められた。たとえば、今回の中国語での使用頻度の基準では、「実行」は高頻度、「注目」は低頻度（表1を参照）となっている。連語の正答率（表3を参照）をみると、「実行に移す」の全体の正答率は17.1%で、上位群でも正答率がわずかに37.9%であった。それに対して、「注目を集める」の全体の正答率は63.4%と非常に高く、下位群でも正答率は56.0%に達していた。その理由は、S語が中国語であまり使われない語の場合、共起する中国語の動詞も想起されにくく、中国語の知識が活用できない。そのため、日本語として習得するしか方法がなく、結果として習得が進みやすくなるのだと考えられる。

7. 今後の課題

最後に、今後の課題を整理しておく。まず、他の言語を母語とする日本語学習者と比較し、本研究の結果が中国人日本語学習者に特有の傾向か否かを検討する必要がある。また、各連語について日本語習熟度と選択肢の選択率の関係を分析し、中国人日本語学習者がどのような語において母語の影響を受けやすいのかを詳細に検討する必要もあろう。さらに、考察で想定したようなストラテジーを使うことによって、習得や意味推測が行われているかどうかについても、今後明らかにしていきたい。

参考文献

- 大曾美恵子・滝沢直宏（2003）「コーパスによる日本語教育の研究—コロケーション及びその誤用を中心に—」『日本語学』23、234-244.
- 黄叢叢（2017a）「中国語を母語とする日本語学習者の同形語と機能動詞の連語形式の習得に関する研究」『国際日本学研究論集（明治大学大学院）』6、19-41.
- 黄叢叢（2017b）「中国語を母語とする日本語学習者の同形語と和語動詞の連語形式の習得に関する研究—機能動詞結合の観点から—」明治大学修士学位論文.
- 曹紅荃・仁科喜久子（2006）「中国人学習者の作文誤用例から見る共起表現の習得及び教育への提言—名詞と形容詞及び形容動詞の共起表現について—」『日本語教育』130、70-79.
- 小森和子（2014）「日本語学習者の語彙知識の習得に及ぼす第一言語の影響—中国語を第一言語とする日本語学習者の和語習得を通して—」『国際日本学研究』6、91-115.
- 小森和子・早川杏子・玉岡賀津雄（2017）「日中対照漢字二字熟語データベース」『明治大学国際日本学研究』9（1）、209-231.
- 小森和子・三國純子・徐一平・近藤安月子（2012）「中国語を第一言語とする日本語学習者の漢語連語と和語連語の習得—中国語と同じ共起語を用いる場合と用いない場合の比較—」『小出記念日本語教育研究会論文集』20、49-60.
- 朴善嫻・熊可欣・玉岡賀津雄（2014）「同形二字漢字語の品詞性に関する日韓中データ

- ベース」『ことばの科学』第27号（特集号）、53-111.
- 村木新次郎（1991）『日本語動詞の諸相』ひつじ書房.
- 孟盈（2015）「中国語を母語とする日本語学習者における語彙習得研究—言語間類似性の観点から—」『日本学研究（首都大学東京・東京都立大学・日本語・日本語教育学会）』37、151-164.
- 文化庁（1978）『中国語と対応する漢語』大蔵省印刷局.
- 李文平（2016）「中国人日本語学習者のためのコロケーション学習の指導法に関する基礎的研究—作文データに基づく『名詞+を+動詞』のコロケーションを中心に—」名古屋大学博士学位論文.
- 張淑榮（編）（1987）『中日漢語対比辞典』ゆまに書房.
- 劉瑞利（2016）「中国語を母語とする上級学習者の『名詞+動詞』コロケーションの使用—YUN書き言葉コーパスの分析を通して—」『平成28年度日本語教育学会秋季大会予稿集』79-84.
- 国立国語研究所 NINJAL-LWP for BCCWJ（NLB）〈<http://nlb.ninjal.ac.jp/search/>〉（2018年5月4日 アクセス）.
- 日本語学習辞書支援グループ（2015）「日本語教育語彙表 ver1.0」〈<http://jisho.jpn.org/>〉（2018年5月4日 アクセス）
- 北京語言大学 BCC現代漢語語料庫 〈<http://bcc.blcu.edu.cn/>〉（2018年5月4日 アクセス）

本研究はJSPS科研費（研究代表者：小森和子、課題番号：15K02656）の助成を受けて行われています。